

はじめに—「労働社会の未来を拓くために」に込めた思い

ベルリンの壁が崩壊して20年が経過した。労働の分野においても、この20年は1つの画期だったように思う。壁崩壊は西側諸国の自由主義経済の論理に東側諸国が飲み込まれていく過程でもあった。社会主義は失敗の烙印が押され、東側諸国の存在によって自由主義経済においても社会保障体制が発展した経緯は顧みられず、対立軸をなくした世界経済は自由競争こそが世界を席卷する唯一の論理として拡大していく。世界は自由競争の論理で圧倒されるかにみえた。ところが、対立軸を失った世界は、1991年の湾岸戦争や2001年のアメリカ同時多発テロにみられるように、宗教・民族の対立軸である「文明の衝突」を招いている。同時に、自由主義経済の維持・拡大のために多くの尊い命が犠牲になっていて、その解決の糸口はまだみえない。

本書が読者として考えたのは、大学の教養あるいは専門で労働問題をこれから学ぶ大学生である。壁崩壊の頃、この世に生を受け、その後の社会を体感してきたはずである。1989年、バブル経済によって日本経済は円高不況を脱し、経済大国として、世界が注目した。大学の講義や演習においては、その影の部分を探る労働問題に関心をもつ学生はそれほど多くはなかったように記憶している。ところが、バブル崩壊は日本経済を一変させた。1993年以降に深刻化する学卒者の就職難である就職氷河期、1997年には山一証券や北海道拓殖銀行といった証券・金融の大手企業が倒産し、日本経済に異変が起きていることを決定づけた。成果主義という言葉が流行したのもこの頃からである。それから10年は構造改革という言葉が闊歩し、日本社会の「古い皮袋」を「新しい皮袋」にするために規制緩和が進められた。

アンデルセン童話に有名な「裸の王様」という話がある。この物語では王様の家来たちの誰ひとり、詐欺師がいう「ばかな人」には見えない着物であるという嘘が見破れなかった。結果、王様は笑いものになり、詐欺師はまんまともうける。他人に振り回されることを戒めた話である。この間、この国の経済

界、為政者は構造改革と規制緩和を進めることが社会の進歩と考え続けている節がある。労働分野では雇用流動化、社会保障・社会福祉では高齢社会に対応するための民間ビジネスへの期待である。国民もそれを仕方ないものと思いがちである。私たちは、そうした流れに与しない。なぜならば、これまでの議論では改革後に作られる社会において、いかなる生活・労働条件で報われるかという重要な論点についての十分な議論がなされないまま進められてきたからである。消費者＝労働者であるはずなのに、消費者であることだけが強調された。この結果、「新しい皮袋」に注がれるはずの「新しい酒」は中で熟成することなく、外へと漏れ出した。村山内閣で決定された630兆円もの公共投資を注いだにもかかわらず、なぜ真面目に働く人をワーキングプアへと追いつめる結果になっているのか、私たちの社会は考える必要がある。本書の思いは「裸の王様」に同調せず、王様や詐欺師の社会ではなく「私たち」の社会を作り出すための判断力と行動力を養ってもらうことにある。

今回集まった執筆陣は、編者の兵頭・鬼丸を中心にした関東社労研（関東社会労働問題研究会）のメンバーに九大時代の下山房雄ゼミの参加者や下山さんの旧友を加えた、日本の労働社会の改革について、忌憚なく議論できる仲間たちである。「あとがき」にもあるように、下山さんの「磁力」に引き寄せられたメンバーである。下山さんの喜寿にあわせて、この20年間席巻してきた新自由主義の潮流に一線を画す教科書をと考え、上梓することとした。

各執筆者は、現代の若者が新自由主義経済の論理を是とするなかにあることを意識して、各人の教育経験も活かして、大学生が誤りがちな労働問題に関する「常識」の非常識を直すことを執筆の方針として立てた。また、各章には厳選したキーワード（補論を除く）と推薦図書（特別寄稿を除く）を挙げている。キーワード、推薦図書ともに、一過性のものではない賞味期限が長いものを採用した。

本書の構成は3部立てである。各部の冒頭章を編者3名が担当しており、各部に関して総括的に論じたものを配置した。しかし、それは単なる問題提示ではなく、各編者が副題を付けているように、それぞれが構えるスタンスから各

部で取り扱うテーマを独自に論じたものでもある。

構成は、I部に労働条件の基本である賃金・労働時間問題、II部に雇用問題、III部に労働組合・労使関係問題とし、これに特別寄稿を加えたラインナップである。各章の内容は冒頭に要約を付しているの、そちらを参考にして欲しい。また、II部、III部の補論として、執筆者の個性を活かした形で掲載を試みた。補論に限らず、執筆者によって、書きぶりには多少差異はあるが、無理に統一することはしなかった。各章が論争的な内容を含んでおり、無理に統一すると論文の良さが減ってしまうと考えたからであるが、本書の評価は読者に委ねたい。もし、数あるテキストと比べて本書のスタイルに共感してくれる読者がいれば、歯に衣を着せずに真正面から正論をぶつけた下山さんの生き様に執筆陣が影響を受けているからであろう。

下山さんについては別冊「下山さんの履歴書」をご覧いただきたい。そこにはいわゆる学術論文だけではなく、一般的には雑文とされているものを可能な限りリストアップした。下山流である。雑文とされているなかには学術論文以上の貴重な資料も含まれている。たとえば、労働組合や争議団のビラが当事者からしか知りえない情報の盛り込まれた第一級の貴重な資料であるのと同じである。これを形式論理で捨象しないとするのが、下山さんの考えである。この考えを採用した。「履歴書」を見れば、下山さんがいかに多くの論文を世に問うてきたかがわかる。ただ、これはその数の多さを示すために作ったものではない。それは、推薦図書に加えて、「履歴書」にある論文にも手を伸ばし、下山流の切り口も論点の1つとして活用されることを願うがゆえである。

余談であるが、編者のひとり石井が下山さんに初めて逢ったのは1988年である。以来20年以上の月日が経った。労働問題がそれほど学生には関心がなかった当時、下山ゼミの研究室の門をくぐったのがきっかけで、労働問題の世界に入り、大学の教員になることなど微塵も考えていなかったのだが、下山さんの不思議な「磁力」に引かれてしまった。熱を上げていた演劇活動をいったん止めて、下山さんと同じ労働科学研究所の研究員を経て、大学教員となり現在にいたっている。さらに、社会政策学会の事務局を東京以外の地で引き受けると

いう経歴までも同じとなってしまった。下山さんは常々大学教員とは研究以上に教育そして社会活動が大事であると述べ、その言動は行動を伴っていた。そうした後ろ姿をみながら育ったお陰で、何とか大学教員としてひとり歩きができています。下山さんがいなければ我々はこうした共同作業を行えなかったし、私も大学教員として存在していなかった。この場を借りて、厚く感謝の意を表したい。

2010年1月

湯けむりたなびく別府の地より、編者を代表して

石井まこと